校のつとめではないかね」
全前線に、退却が命令された。
しばし茫然とした後、誰もが先を争って逃げだした。
学徒出陣の連隊旗手が、「こん畜生」と叫びながら、軍旗を谷に投げ込んだ。
「食い物をくれ、食い物をくれ」と呟きながら倒れてゆく兵士たち。
そのなかを天秤棒を振り分けにして、タロ芋を担いだ若い兵隊が走ってゆく。
工兵隊がクムシ河にかけた橋は、破壊されていた。
筏を組んで河を渡るしかなかった。
堀井少将と田中参謀は、筏から落ちた。
救おうとする部下たちに「わしらのような年寄りに構わず、君たちは助かってくれ」と云って沈んでいった、と後に岡田は、小太りの副官に聞いた。
海岸に着いた。
夕方になって、二隻の輸送船がやってきた。
夜半に出港した。
岡田らが乗り込んだ船は、アメリカ軍機に攻撃されて沈没した。
何とか僚船に助けられた。
ラバウルに戻った。
留守をしている間に、ラバウルは焼野原になっていた。
ハイビスカスの花が咲き乱れていた島嶼は、爆弾の破片と火山灰にまみれていた。
方面軍参謀、大本営参謀、随行してきた記者が犇めいていた。
誰もが、ガダルカナルの話をしている。
岡田が、ニューギニアの話をすると、「時と場所を心得ない奴」と云わんばかりの反応をされた。
記者団は、大本営参謀に、共同記者会見を、申し込んだ。
数次に及ぶ交渉の末に、会見は実現した。
やってきたのは、辻政信中佐だった。
精悍な顔つきをした辻参謀は、大股で長靴を鳴らしながら席についた。
どこか、きらびやかな輝きがあった。
「アメリカはやりよるぞ！　諸君、大したものだ」
率直に語りだした。
三十分語り、退場しようとした。
(これでは、ガダルカナルの話だけで終わってしまう)
「ポートモレスビーの山越え作戦について、何かコメントは」
資料をしまいかけた手を止めて、辻は答えた。
「あれは、君、山を越えた方が負けだよ」
帰国した後、岡田は新聞の合本の頁を繰った。
東部ニューギニアについての記事は、大本営の簡略な発表だけだった。
議会への戦況報告で、東條陸相が「ガダルカナルおよびブナにおいて苦戦せる皇軍は」と少しだけ触れているのを発見した。

岡田は、『ニューギニア山岳戦』と題した小説を執筆し、『新青年』に投稿した。
書けない事ばかりだったが、ここで自分が書いておかなければ、という心持ちで筆を執った。
フィリピンに出張中、邦字新聞に自分の顔写真が載っていた。
何だろう、まさか訃報じゃないだろうな……
『山岳戦』が直木賞を受賞した、という記事だった。

∴

ドゥーリットル飛行士の処分問題で、陸軍が紛糾していた。
爆撃後、中国に逃げた飛行士のなかで、八人が不時着などを経て、日本側に捕捉され上海の収容所に拘束されていたのである。
防空の責任を負う参謀本部は、強硬だった。杉山元参謀総長は、部下につきあげられ、無差別爆撃は戦争犯罪であるから、捕虜となった飛行士は厳しく処断するべきだ、と陸軍省に要求してきた。
東條は苦慮した。
彼の人は、人道上の立場から、敵兵にたいして酷い扱いをする事を忌避していた。
その心中が良く解っていたので、参謀本部の要求をそのまま受け入れるわけにはいかない。
(だいたい無差別爆撃は、海軍が重慶に対して何十回も行っているのだから、処罰を正当化するのは難しかった)
とはいえ、空襲での死者が五十名、全焼家屋三百戸という被害が出ているので、何もしないわけにもいかない。
結局、彼の人の意志を忖度しつつ、空襲隊員の処分が検討された。
日本は、ジュネーヴ条約を批准してはいなかったが、開戦当時、アメリカからの問い合わせに対して条約を遵守すると回答していた。そのため、空爆に参加したというだけでは、戦争犯罪に問う事はできない。一般人を無差別に殺傷した場合にのみ、罪を問える可能性が出てくる。けれども、当時、このような罪への処罰を規定した国際法規の条文は存在しなかった。
参謀本部は独自の軍律を作成し、飛行士たちを裁く事にした。
軍律を定め、軍律法廷を設ける権限が戦闘現地の最高指揮官にある事は、国際的に認められていた。
結局、軍律法廷は、アメリカ側はもちろんの事、日本でもごく少数の人間しか識らないうちに、上海で開かれた。
法廷は、被告全員を有罪とし、死刑判決を下した。
「陛下の御仁慈を体して、死一等を減じることにしたいのだ